

岩手県野田村の支援活動報告 (2011年4月12日)

ボランティアセンター事務局・人文学部・山口恵子

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県野田村。2011年4月12日(火)、弘前大学人文学部ボランティアセンター(仮称)の主催で、初めて野田村での支援活動を行った。私は、事務局の一員として準備をしてきたが、ついにこの日がやってきた。よりによって前日には大きな余震もあり、事故などありませんように、と祈るような気持ちだった。

朝5時半に大学正門前に着くと、すでに赤い立派なバスが横づけされていた。今回の活動が実現したのは、マルイチ観光さんがボランティアでバスを提供してくださったことが大きい。初老の運転手さんに、丁寧にごあいさつをする。そうこうしているうちに、次々と、長靴と防寒着を着こんだ人々が、笑顔で集まってきた。

この日の参加者は、大学生19名、教員5名、一般市民11名の計35名である。朝6時過ぎに、予定通りに出発する。3時間弱の行きのバスのなかでは、事務局の李さんの司会のもと、全員の自己紹介、作業用品の配布、野田村支援に関する経過説明、ボランティアにあたっての注意などが行われる。途中、休憩をはさみながら、あっという間に、9時前には目的地に到着した。



行きのバスの中。学生も一般市民の方も一緒に。

野田村役場の駐車場では、すでに現地で活動している青森県の社会福祉協議会の方が出迎えてくださった。女性の一部は個人のお宅で掃除、他の女性は援助物資の仕分け、男性はすべて「瓦礫」や泥の撤去、ということで、すぐに分かれて作業につく。後から聞いたのであるが、このようにスムーズに作業にとりかかれたのは、事前に社会福祉協議会の方が、コーディネートしてくださったことが大きいそうである。

私は体育館での援助物資の仕分けに参加した。私自身は、3月末に一度視察に来ていたので驚かなかったが、学生たちは、広い体育館中に山積みされた支援物資の量に圧倒されていたようである。野本さんという地元の若い男性が、物資の仕分けについて説明をしてくださった。



段ボールの山に囲まれながらサクサク仕分け。

今日の私たちの仕事は、送られてきた衣類の仕分けである。山積みされた衣類の入った段ボールを開ける。そして、ゴミ袋や段ボールに「古着・男性・防寒着」「新品・女性・上着」「古着・男児・上着」「古着・ベビー」などと分けて、マジックで書く。そして、中にどんどん入れて整理していく。

最初は、袋を手にはたと困った。服といっても種類は無数で、床のスペースも狭くて場所がない。「エプロンって何になるの?」「これは男性物、女性物?」「新品・女性・上着の袋って作ったっけ…?」午前

中は、みんなとまどいながら、地元の1人の若い女性、久慈市から来たボランティア女性3名も含めて、お互いにコミュニケーションも少なく、バラバラにやっていたような気がする。

12時前から休憩に入る。役場の会議室に行くと、すでに男性陣がご飯を食べている。一般参加の男性の方々が、学生にいろいろと話をしてくださっていた。聞くと、やはり農業などの経験のある一般参加の方々は、作業に慣れておられ、学生にぜひ作業指導をしてくださったそうである。今回、学生と一般の方々が一緒に活動することは、とても良かったようだ。

仕分け組の7名で集まってゆっくりしていると、同じテーブルに、50代くらいの小柄な女性が、一個のパンを手に席に着いた。彼女はゆっくりと話してくださった。まだ新しかった家がすべて流されたこと、何もかも失ったこと、子どもに命を助けられたこと、今は雇用促進住宅に入っているが、仮設住宅の建設を待っていること…。こちらはなかなか言葉が見つからなかったが、学生は真剣な表情でお話にうなずいていた。

午後の仕分けは、最初に、みんなで効率的な分け方を話し合った。学生たちは、「まず男性・上、女性・下などと大きく分けよう！」などと次々にアイデアを出した。それ以降は、地元の若い女性を含めてみんなが自然と役割分担し、ものすごいスピードで作業が進んだ。早くも少し腰にきていた私は、ちょっと手をゆるめて、仕分けされた服を通路に出す作業をした。

15時半ごろには、作業終わりとなる。バスに戻ると、すすけた男性たちがだいぶ疲れた様子で、長靴を脱いでいた。聞くと、午後の作業がけっこうキツかったそうである。でも、みんなが事故もなくすべての作業を終えたことに、一安心する。帰りのバスでは、一人ずつに感想を語ってもらった。これが、たいへんすばらしいものであったが、その内容は事務局の作道さんのレポートにゆずる。20時前には大学に戻り、解散となった。

最後に、ひとつ。昼にお話しをしてくださった地元の女性と、帰り際の役場の階段で、バッタリ出会った。彼女の後ろには、ランドセルを背負った小学生の男の子がくっついていて、彼女は、泥のついた免許証とアルバムのようなものを手に持っていた。「娘のこれがあったの…」と、本当にうれしそうに、娘さんの写真のついた免許証を見せてくれた。「瓦礫」の撤去というが、それは人々の生きてきた証しや思い出を探すプロセスであり、そこで見つけられたものが、こんなにも人々の笑顔を取り戻すのだな、と思った。

私たちの活動は期間も短く、小さなものであるが、こうした作業に関われることは、尊いなあと思った。さまざまな方のご協力のもと、支援活動が実現したことに、深く感謝したいと思う。そして、早く人々の日常生活が戻ってくるように、息の長い支援が必要だと感じた。



さまざまなものを片付ける（写真は飯考行氏提供）